

〈資料〉

## H.S. フォックスウェル文書と日本

— 末松謙澄・益田孝・添田寿一書簡 —

### Letters of Suyematz Kencho, Masuda Takashi, and Soeda Juichi regarding Foreign Employee Lecturers at the Commercial School (Tokyo) and Imperial University(Tokyo) in the Foxwell Papers at Kwansei Gakuin

井 上 琢 智

JEL : B15, B31

キーワード：末松謙澄、益田孝、添田寿一、H.S. フォックスウェル、お雇い外国人教師、商業学校（東京）、帝国大学（東京）

Keywords : Suyematz Kencho, Masuda Takashi, Soeda Juichi, H.S.Foxwell, Foreign Employee Lecturers, Commercial School (Tokyo), Imperial University (Tokyo)

#### I はじめに

本資料は、関西学院創立 125 周年記念事業の一環として関西学院大学が購入したいわゆる“Foxwell Paper”（H.S. フォックスウェル文書）<sup>1)</sup>に含まれる

1) 「H.S. フォックスウェル文書」の概要については、井上琢智『フォックスウェル文書に見る世界的な知の交流』（「第 22 回＜2013 年度＞関西学院大学図書館学術資料講演会・特別展示」資料、2013 年 11 月 1 日～30 日）、井上琢智「フォックスウェル文書に見る世界的な知の交流」（『時計台』関西学院大学図書館報、no.84、2014 年 4 月、4-13 頁）を参照のこと。なお、井上琢智「フォックスウェル文書に見るお雇い外国人簿記・経済学教師の雇用—東京商業学校と東京大学—」（『経済学論究』＜関西学院大学＞第 68 巻第 3 号、99-123 頁）および井上琢智「H.S. フォックスウェルと日本」（『時計台』関西学院大学図書館報、no.85、2015 年 4 月、16-27 頁）をも参照のこと。

膨大な書簡中、日本人がフォックスウェル宛て書簡<sup>2)</sup>の一部を中心に翻刻したもので、テーマ別に 5 つのグループに分けることができる。

最初のグループは、ケンブリッジ大学のセント・ジョーンズ・カレッジに留学し、1884 (明治 17) 年 5 月にトライポス (法律) に合格していた末松謙澄が、東京大学を卒業し、ケンブリッジ大学に留学しようとしていた添田寿一を「生徒」として受入可能かをフォックスウェルに打診し、また当時停滞していた日本の株式取引所についてのアドバイスを求めるものである (Letter 【1】～【3】)。

第二のグループは、1880 年代後半、東京商業学校のお雇い外国人教師および政府経済顧問の推薦を A. マーシャルを中心とするケンブリッジ大学コネクション (J. ステュアート、H.S. フォックスウェル) に依頼するものであり、この教師募集にかかわった三井物産の益田孝のフォックスウェル宛を含むものである (Letter 【4】～【7】)。

第三のグループは、1890 年代後半に帝国大学のお雇い外国人教師および政府経済顧問の推薦を H.S. フォックスウェルに依頼するものであり、その被推薦者の中に「フォックスウェル」があったことを聞いた W.S. ジェヴオンズの妻 H.A. ジェヴオンズに与えた影響を示すものである (Letter 【8】～【10】)。

第四のグループは、帝国大学の経済学のお雇い外国人教師として就任した H.S. フォックスウェルの弟 E.E. フォックスウェルの日本での活動を示すものであり、同僚であった中島力造の学生による H. シジウィックの『倫理学説批判』の邦訳・出版に協力したアーネストの姿を示すものである (Letter 【11】・【12】)。

最後の一通は、H.S. フォックスウェルや A. マーシャルから経済学を学んだ

---

2) 現在確認できている日本人・日本の大学等から H.S. フォックスウェル宛て書簡は 91 通である。その中で、名前がほぼ確定できたのは、江口定條 (2 通)、藤村義朗 (3 通)、早川千吉郎 (8 通)、稲葉正繩<sup>マサナオ</sup> (3 通)、桑田熊蔵 (1 通)、京都帝国大学 (2 通)、益田孝 (2 通)、松村謙三 (未確定 1 通)、松浦厚 (未確定 1 通)、宮島綱男 (1 通)、森賢吾 (4 通)、武藤長蔵 (1 通)、小川郷太郎 (1 通)、岡部長職<sup>ナガトモ</sup> (1 通)、阪谷芳郎 (1 通・未確定 1 通)、添田寿一 (16 通・未確定 1 通)、添田定一 (1 通)、末松謙澄 (8 通・未確定 1 通)、渡辺専次郎 (1 通)、米山梅吉 (未確定 1 通) である。

添田寿一が、日英の懸け橋となるべく多くの添田の東京大学時代の同級生の一人で、卒業と同時に大蔵省へ入省し、後に大蔵大臣となり、その職を辞し渡英を計画して阪谷芳郎を H.S. フォックスウェルに紹介するものである (Letter 【13】)。添田は、この「H.S. フォックスウェル文書」に含まれているが今回翻刻・紹介できない書簡で、松村謙三、Shiokawa, S.(Bank of Japan)、早川千吉郎、Ota, S.、大隈重信、桑田熊蔵、Murata, T. をフォックスウェルに紹介している。

### 書簡一覧

#### 【テーマⅠ：末松・添田・株式取引所関連】

Letter 【1】	1884/11/23	K. Suyematz <sup>3)</sup>	to H.S.Foxwell
Letter 【2】	1884/11/25	K. Suyematz	to H.S.Foxwell
Letter 【3】	1884/11/28	K. Suyematz	to H.S.Foxwell

#### 【テーマⅡ：東京高等商業学校教師・政府経済顧問の推薦】

Letter 【4】	1887/08/05	J. Stuart <sup>4)</sup>	to H.S.Foxwell
Letter 【5】	1887/08/09	A. Marshall <sup>5)</sup>	to H.S.Foxwell
Letter 【6】	1887/09/06	T.Masuda <sup>6)</sup>	to H.S.Foxwell
Letter 【7】	1887/09/06	T.Masuda	to H.S.Foxwell

#### 【テーマⅢ：帝国大学教師のエッゲルト後任雇用】

Letter 【8】	1895/06/19	J. Soyeda <sup>7)</sup>	to H.S.Foxwell
Letter 【9】	1896/03/20	J. Soyeda	to H.S.Foxwell
Letter 【10】	1896/06/21	H.A.Jevons <sup>8)</sup>	to H.S.Foxwell

---

3) 末松謙澄 (1855-1920)

4) James Stuart (1843-1913)

5) Alfred Marshall (1842-1924)

6) 益田孝 (1848-1938)

7) 添田寿一 (1864-1929)

8) Hariret Ann Jevons (1838-1910)

【テーマⅣ：アーネストと日本】

Letter 【11】 1898/03/24 E.E.Foxwell<sup>9)</sup> to H.S.Foxwell

Letter 【12】 1910/02/06 E.E.Foxwell to H.S.Foxwell

【テーマⅤ：添田の紹介者・仲介者としての役割】

Letter 【13】 1908/03/18 J. Soyeda to H.S.Foxwell

【翻刻】

Letter 【1】<sup>1)</sup> 1884 年 11 月 23 日

88 Lancaster R<sup>d</sup>.

Bayswater

Nov 23 [1884]<sup>2)</sup>

Dear Professor

Allow me to introduce you [to] J. Soyeda, a compatriot of mine. He is a Graduate of our University there [and] he studied economy & State laws and wishes to attend your lectures.<sup>3)</sup> I shall consider it as a personal favour if you will take some interest in him & give him such periodical[,] occasional<sup>4)</sup> advice as you might think desirable or as he might ask you for carrying out his plan of study.

I am dear Professor

yours sincerely

K. Suyematz<sup>5)</sup>

1) 封筒表には、Professor Foxwell / University (このスラッシュは改行を示す。以下、同様)とあり、その上に“Borne by Soyeda”、その下に“K. Suyematz”と書かれている。これにより、この文章は添田が持参してフォックスウェルに手渡したことが分かる。ただし、便宜上 Letter と表記する。

2) 翻刻文章内の [ ] は、井上による追加である。以下、同様。

3) 添田寿一は、1882 年、東京大学文学部「政治学及経済科」に入学し、1884 年 7 月に卒業した。

9) Edward Ernest Foxwell (1851-1922)

大蔵権大書記で同大学の講師であった田尻稲次郎の勧めで、阪谷芳郎とともに大蔵省に入省した。その年9月に、大蔵省から非職の辞令を受けてケンブリッジ大学への留学を希望した。当初、「君[添田]の志望はケンブリッジ大学に入りて[H.]フォーセット先生に就き経済学を修むるに在りし故、途中にて先生永逝[11月6日]の報に接し落胆されたるも、幸ひマーシャル先生が後任となられたとの報に安心して[1884年]11月着英後直にマーシャル先生を師と頼み、先生も快諾され、……」(西川俊作[1985]101頁)。

この書簡によれば、添田はフォーセットの死に接し、すでに St. John's College で学び、1884年5月にトライボス(法律)に合格していた末松謙澄(Clark, J.W. ([1902] p.582))を介して、当時 St. John's College のフェローで、ケンブリッジ大学の経済学講師をしていたフォックスウェルのもとで学びたいとの意向を示したことになる。ただ、「定期的だが時折の助言」とあることから、当時ケンブリッジ大学で「コーチ」と呼ばれていた「大学の公的な制度にまったく関係ない私的な教師」(小山騰[1999]98頁)であったと思われる。事実、添田が正式に在籍したのは、1885年のレント・ターム(1~3月)からであり、そのタームから、A. マーシャルはフォーセットの後継者としてケンブリッジ大学の経済学教授に就任し、添田はマーシャルから経済学を学ぶこととなった。ただ、東京大学で学士号をすでに取得していた添田は、ケンブリッジ大学の「カレッジに属さない学生(non-collegiate student)」としての在籍であった。

- 4) この“occasional”の挿入は、末松によるものである。
- 5) 現時点では、末松謙澄がフォックスウェルと知り合った経緯を具体的に示す明確な証拠を発見できてない。ただ、末松謙澄は、明治11(1878)年イギリス駐在日本公使館一等書記生見習い(1880年12月末に依願・免官)となって渡英し、1879年から80年まで、University College, London [在籍名簿名はSuyematz, K.]で学び、転じて、1881年のミケルマス・ターム(10~12月)にケンブリッジ大学で「カレッジに属さない学生」として在籍した。菊池大麓(1873年5月 St. John's College への入寮許可、10月入寮、1877年トライボス<数学>合格)、村上敬次郎(1871年イギリス留学。1873年11月 Trinity College への入学許可、1874年帰国)について三人目のケンブリッジ大学留学生であった。彼は1883年10月には St. John's College に入寮し、1884年まで学び、同年12月に LL.B.(法学博士)の学位を得た(小山騰[1999]76-131、82-84、134-48頁)。末松のこのケンブリッジ時代、フォックスウェルは同カレッジのフェロー(1874-98、1905-36)であり、1881年からユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンの経済学の教授(-1922)であった。この客観的な状況から判断すると、ユニヴァーシティ・カレッジで互いに知り合った可能性をまったく否定できないものの、ケンブリッジ大学、それも St. John's College で知り合った可能性の方が高い。

Letter [2]<sup>1)</sup> 1884年11月25日

88 Lancaster Rd<sup>d</sup>

Notting Hill

W.

25 11 [18]84

Dear Professor

I have to thank you for your kind reception of Soyeda as your pupil.<sup>2)</sup>

I wish to ~~trouble~~<sup>3)</sup> be allowed troubling you with the following matter.

In Japan the question of utility and nonutility of the system of the Stock-exchange<sup>4)</sup> has become quite recently a kindled subject both in the r[eg]islative and commercial circle[s]. It is not a mere academical discussion for the parties concerned as you know have practical interest in the matter and they are able to make ~~law~~<sup>5)</sup> or remake the laws affecting it.

Under the circumstances I am asked by<sup>6)</sup> some friends of mine who have deep interest of their own in the matter to obtain for them a kind of an essay on the subject, were it short, as a guidance for their argument. I shall feel most obliged if you ~~are~~<sup>7)</sup> can favour us with an essay setting forth the views which you must always have in your stock. In fact your observations will be most valuable for us Japanese because yours will<sup>8)</sup> have some forcible arguments of the “New ~~start~~<sup>9)</sup> school” of economy.<sup>10)</sup> Of course my friends are anxious to offer you<sup>11)</sup> a reasonable ~~rego~~<sup>12)</sup> remuneration of your trouble though I know perfectly well that you will not undertake anything for such of remuneration unless you are really inclined to do so.

The views of my friends are that stock exchange is a thing which cannot be suppressed, if suppressed publically<sup>13)</sup> by an ingenious method, then it will be practiced clandestinely, so that it will be far better to allow [it] publicly and regulate its proceedings according to the requirement of the times & circumstances, besides my friends believe that it helps in many respects the activity of commerce and gives indirect stimulus to the growth of industry. I wonder if you can agree to this. If so my friends will be most happy if you will develop this idea with your usual lucidity in the shape of an essay. It need not be long. Hoping to receive a favourable answer[.]

Yours sincerely,

K. Suyematz

P.S.

I said “stock exchange” but “speculation” might be the better term<sup>14)</sup> for I intend to include in it “rice exchange” as well as “money exchange.” In Japan rice exchange [is] somewhat similar to your corn exchange<sup>15)</sup> so equally important as<sup>16)</sup>, may [be] almost more than stock exchange. Money exchange is also important because paper money is inconvertible. I wish therefore you will also bear this in mind.

- 1) 封筒表には、以下の宛名・住所が書かれている。

Professor Foxwell / St.Johns / Cambridge

なお、この宛名・住所の上に、他の筆跡による以下のメモが書かれている。

Suyematz ans[were]<sup>d.</sup> / Stock Exchange

- 2) 当時、トリニティ・カレッジのように入寮のための試験を実施した学校とは異なり、セント・ジョーンズ・カレッジは入寮のための試験を課してはおらず、人物や学力を保証する推薦状があれば入寮が許可された。ただ、添田の場合には「カレッジに所属しない学生」として、大学に学生として登録すればよかった（小山騰 [1999] 76、139 頁：Clark, J.W. [1902] p.563）。

ケンブリッジ大学は、1884 年 11 月 6 日、H. フォーセットが死亡し、翌日 7 日に経済学講座の欠員を告知した。ただ、マーシャルがフォーセットの後任に選出されたのは、1884 年 12 月 13 日開催の第 1 回目の選考会議においてであった（Groenewegen, Peter [1995] p.306）。この書簡は、後任決定以前の返事であることを考えると、フォックスウェル自身が添田を「コーチ」として受け入れるとの返事をしたこととなる。

1877 年、結婚のためにマーシャルがケンブリッジ大学を去ったため、彼に代わり、フォックスウェルがシジウィック（Henry Sidgwick, 1838-1900）、ケインズ（John Neville Keynes, 1852-1949）と協力して、トライポス用の経済学の責任者となり、マーシャルがケンブリッジ大学に戻って以降も、フォックスウェルはマーシャルを助けて経済学を教えていた（Keynes, J.M. [1980] 353 頁）。このことから、添田はマーシャルとフォックスウェルから経済学を学ぶ機会があった。

- 3) この “trouble” の削除は、末松によるものである。
- 4) 1878（明治 11）年の株式取引所条例に基づいて同年 5 月に東京株式取引所が、6 月に大阪株式取引所が設立された。しかし、当初の取引対象が新・旧公債や金禄公債等の明治維新政府初期の公債のみであったため、株式取引市場の発展は十分ではなかった。80 年代後半以降、株式会社制度の拡大とともに、取引は多少増加したものの、株式発行が銀行業・鉄道業・繊維業等に限られていたため、証券市場の発展は限定的に過ぎなかった（平凡社 [1993] 第 3 巻、1213-14 頁）。
- 5) この “law” の削除は、末松によるものである。
- 6) この “by” の挿入は、末松によるものである。

- 7) この “are” の削除と “can” への変更は、末松によるものである。
- 8) この “well” の挿入は、末松によるものである。
- 9) この “start” の削除と “school” への変更は、末松によるものである。
- 10) この “New school” of economy とは、歴史学派のことを指すのであろう。「もしも任命がビグーの 2 人の競合者であったフォックスウェルかアシュリーのいずれか……になっていたとしたら、ケンブリッジ経済学の力点は、動学的、統計的、経験的でリアリスティックな研究にもっと決定的にシフトしていたであろう」（西沢保 [2007] 135 頁）と指摘されるように、マーシャルがフォックスウェルを「新学派」の一人として、アシュレーほどではないにせよ、評価していたことになる。当時、「新学派」と呼ばれていたのは、この歴史学派だけでなく、W.S. ジェヴォンズを代表者とする限界原理を軸とする「理論的・分析的経済学」すなわち「近代経済学」にも付けられた名称でもあった。従って「理論的・分析的経済学が応用経済学と経済史の犠牲」（西沢保 [2007] 135 頁）にならないようにマーシャルは後継者にビグーを選んだ。
- 11) この “you” の挿入は、末松によるものである。
- 12) この “rego” の削除は、末松によるものである。
- 13) この “publically” の挿入は、末松によるものである。
- 14) この “term” の挿入は、末松によるものである。
- 15) 1876 (明治 9) 年 8 月米紹介所条例・米紹介所成規が制定された。それにより、その 8 月に東京商社 (東京為替会社の後身) は兜町米商会所と改名され、10 月開業した。9 月には大阪堂島米商会所創立が出願され、11 月開業した (岩波書店編集部 [1991] 68 頁)。これら米商会所の名で先物市場が開かれ急速に発展した。1893 (明治 26) 年に施行された取引所法 (後に商品取引所法と改称) により、米穀取引所としての組織が確立され、全国的な規模でその役割をはたした。しかし、1939 (昭和 14) 年米穀配給統制法の施行に伴って廃止された。
- 16) この “as” の挿入は、末松によるものである。

Letter [3]<sup>1)</sup> 1884 年 11 月 28 日

88 Lancaster Rd.  
Notting Hill  
28.11. [18]84

Dear Professor

Allow me to supplement the following to the letter I wrote you yesterday by your indulgence[.]

I there said the writing should be in [the] shape of an essay, but after a further consideration I came to think that that form might be too formal & give you more trouble. If so[,] a writing addressed to me in the form of a

letter <sup>2)</sup>(in way of an answer to my question)<sup>2)</sup> will do very well ~~provided~~<sup>3)</sup> if you think that form is preferable. The length needs not be longer than a leading article of Newspapers, even shorter will do, should you be able to favor me with one.

I sincerely beg of you not to consider me to be taking too much liberty of you because you are the only man from whom I can look forward for an authority on the subject of the kind.<sup>4)</sup>

I am

yours sincerely

K. Suyematz

1) 封筒表には、以下の宛名・住所が書かれている。

Professor Foxwell M.A. (Fellow) / St[.] Johns / Cambridge

また、ロンドンの消印が押されている。なお、この宛名・住所の上に、他の筆跡による以下のメモが書かれている。

Suytematz ans[were]<sup>d.</sup> / Stock Exchange

2)-2) この挿入は、末松によるものである。

3) この“provided”の削除と“if”への変更は、末松によるものである。

4) フォックスウェルが株式取引所問題の権威だと末松が評価した根拠は不明である。この書筒が送られた1884年末までにフォックスウェルが公刊したのは、W.S. ジェヴォンズの『通貨および金融の研究』への序文だけであり、その後の彼の研究にもこの分野の専門的研究は見られない(Keynes, J.M. [1980] 386-91 頁)。

Letter [4]<sup>1)</sup> 1887年8月5日

QUEEN ANNE'S MANSION,<sup>2)</sup>

S<sup>t</sup> JAMES'S PARK. S.W.

Aug: 5 1887

Dear Foxwell,

I am asked to recommend some one to be teacher of Political Economy in the Commercial School at Tokio<sup>3)</sup> in Japan. <sup>4)</sup>(age of pupils 16 to 23)<sup>4)</sup> He would rank with the Professors at the University<sup>5)</sup> there & would get

1000 £ a year if a suitable man. Employment for 3 years certain. <sup>6)</sup>Do you know of any one? —<sup>6)</sup>

He would need to be a man who knew something about Commercial History and about the actual facts banking or of English Commerce, and if possible as to the methods of bookkeeping or of a commercial business.

— These latter are points however on which I could easier let you know by conversation what is wanted than by letter.

Are you likely to be in London any time soon. If so could you meet the Japanese gentleman who is well up in the whole matter.

I should like you to do so for the post is an important one and also for a further reason that their Gov[ermen]<sup>t</sup> is contemplating getting at a large salary (1500 £ or more) some one to go out there to be general advisor to the Gov[ermen]<sup>t</sup> then in Political Economy teaching — This however is sub judice.

Yours faithfully  
J. Stuart<sup>7)</sup>

1) 封筒表には、以下の宛名・住所が書かれている。

Professor Foxwell / S<sup>t</sup> Johns College / Cambridge

また、封筒表の宛名・住所の上に、他の筆跡による以下のメモが赤字で書かれている。

Japan / Masuda / interview

封筒裏には、**QUEEN ANNE'S MANSIONS**、と印刷されている。

2) ボールドの文字は、Letterhead など印刷された文字であることを示している。

3) “the Commercial School at Tokio” とは、東京商業学校である。この書簡が出された 1887 (明治 20) 年の 10 月 5 日になって高等商業学校 [Commercial College : Letter [6-1] 注 3) も参照のこと] と改称された。

この東京商業学校は、日本における商業教育機関の設立の重要性を認識した森有礼が創立した私塾商法講習所にその起源がある。その創立にあたり森は、イエール大学を卒業後ニューアークでブライアント・ソトラットン・アンド・ホイットニー・ビジネス・カレッジを創立していたホイットニー (W.C. Whitney, 1825-1882) を招聘した。1875 (明治 8) 年 8 月 3 日、横浜にホイットニー一家は着いた (クララ・ホイットニー、一又民子訳 [1976] 上、18 頁)。彼が来日した際には学校は未だ建設されておらず、東京銀座尾張町の鯛味噌屋の二階に私塾商法講習所が開設され、日本で最初の商業教育が開始された。ところが森が清国駐節全権公使に任命され、学校経営から離れざるを得なくなり、同年 11 月になってその管理が東京会議所 (後の東京商業会

議所・東京商業会議所・東京商工会議所)に委ねられることとなり、私塾商法講習所から東京府所管商法講習所となった。翌1876(明治9)年5月に木挽町10丁目14番に移った。同年6月、所長に矢野二郎(次郎兵衛が本名であり、その点で次郎が正しいが、好んで二郎と書いた)が就任した。矢野は森の推挽で外務省二等書記官として渡米した人物であり、また、益田と矢野とは幕府騎兵隊時代の同期生であり、益田は矢野の義弟であった。その益田は、1879(明治12)年11月、渋沢栄一・福地源一郎とともに商法講習所委員となった。当初、矢野は「ホイットニーと謀り、欧米商業学校の教科課程を参酌し、之を我国の実際に比照して学則を定め校則を整へ、実践科、をも併せ置いた」。しかし、矢野の「性豪宕不羈」(酒井龍男[1925]4-7頁および年表)もあってホイットニーと「うまく」いかなくなり(ホイットニー、クララ：一又民子訳[1976]上、262頁)となり、1878(明治11)年6月1日に解雇された。1883(明治16)年11月、矢野は所長を辞任し、東京府御用掛南貞助が所長事務心得となった。翌年3月、同校は農商務省管轄となり、東京商業学校と改称し、同省権書記河上謹一が校長を兼任し、伊賀陽太郎等を教員に任命した。さらに同年6月、渋沢栄一、富田鉄之助、益田孝が校務商議委員に選ばれた。翌1885(明治18)年5月、文部省管轄となり、さらに1887(明治20)年10月、高等商業学校と改称した(酒井龍男[1925]年表)。なお、ロンドン大学のユニヴァーシティ・カレッジにとともに在籍したことのある南貞助(在籍期間：1866-67)、河上謹一(同：1879-80)、伊賀陽太郎(同：1878-79)については、井上琢智[2006][2008-2,4][2010]を参照のこと。

ところで、この書簡の日付(1887年8月5日)の帝国大学には、ラートゲン(K. Rathgen, 1855-1921:1882年雇用)とこの年の3月に雇用されたエッグルト(U. Eggert, 1848-93: Letter [8]の注2参照)が在職しており、お雇い外国人教師を採用する必要はなかったし、担当課目の中に簿記“bookkeeping”などがあることから帝国大学教師の雇用の依頼ではなく、東京商業学校教師の雇用依頼であることが分かる。

- 4)-4) この挿入は、ステュアートによるものである。
- 5) この the University が帝国大学である。
- 6)-6) このセンテンスは、インクの色から見て、ステュアートによる追加の文章と思われる。
- 7) ステュアート(J. Stuart, 1843-1913)は、スコットランドのマーキンチ(Markinch)生まれの教育者で政治家。セント・アンドルーズ大学とケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジで学び、同カレッジのフェローに選ばれた。1875年からケンブリッジ大学の機械学・応用機械学(Mechanism and Applied Mechanics)の教授となった。彼は科学のトライボスの普及に努め、ケンブリッジ大学の「公開講座」を1867年から68年にかけてイギリス北部で行った。それがケンブリッジ大学の社会貢献となり、「今日、『公開講座委員会』の管理下で整備拡張」(安東伸介・小池滋・出口保夫・船戸英夫編[1982]477頁)された。

A. マーシャルの夫人となった M. ベーリーはステュアートの勧めで、大学公開講義の経済学のテキストを書くことになった。それが A. マーシャルとの共著となった *Economics of Industry* (1879)であったが、「それが本当は彼の著作でなければならないことが分かっていた。後半はまったく彼のもの」であった(Keynes, J.M. [1980]316頁)。また、1898年から1901年まで、セント・アンドルーズ大学の3年任期の名誉学長となった。J.S. ミルもまた1867年に名誉学長に選ばれ、その就任講演が「教育について」(1867年2月1日)で、その中で科学教育を含む「一般教養教育」の重要性を説いた(竹内一誠訳『ミルの大学教育論—セント・アンドルーズ大学名誉学長就任講演「教育について」—』御茶の水書房、1983<『大学教育

について』岩波文庫、2011 >)。

Letter 【5】<sup>1・1)</sup> 1887 年 8 月 9 日<sup>#</sup>

Moday 5 pm

Dear Foxwell

Your letter are just arrived. By sending specially to catch this evenings post I shall get my answer to Cambridge by Wednesday second post.

As to general adviser & counsellor;<sup>2</sup> I w[oul]<sup>d</sup> put .

- i Goschen<sup>2)</sup>
- ii Giffen<sup>3)</sup>
- iii Foxwell, Nicholson<sup>4)</sup> & Palgrave<sup>5)</sup>

The first two are absurd. I guess Nicholson w[oul]<sup>d</sup> not go. There might be some chance of Foxwell or Palgrave. Foxwell is unmarried & Palgrave might like a change.<sup>3</sup>

Of course there are also city men with some knowledge of economics: but I speak only of those whom I know.

As to Professor: a young man wont know banking: a middle aged man might: but if he is willing to go he w[oul]<sup>d</sup> be self-proved a muff & not fit: I think among young men ready made the best I know so far as knowledge goes is Soyeda:<sup>4</sup> But of course they know all about him.

I think they must either take a German who knows a great deal & wont come to much; or if they are to do what is best for them as well as for us a young able English man with pluck & intellectual enterprise, & good judgement & lastly an agreeable temper. I feel I don't know exactly the right man. The three that occur to me are<sup>5</sup>

Sorley<sup>6)</sup>

Price LLFR<sup>7)</sup>

Leathes<sup>8)</sup>

Sorley week point are I sh[oul]d say his promiscuousness, his readiness to get up anything & perhaps a little awkwardness of manner that may — I don't know that it does indicate a little cantankerousness.

Leathers' week point is I think his want of dash & outward show of energy.

Price has not much studies finance.

There I have written out my ignorance. The fact is you know every one I know & many whom I don't know: & I answer more because as you say the question is of vital importance than because I can add anything worth having to what you know.

But before you tell anyone the salary is £ 1000 a year make sure that this is not Stuarts<sup>9)</sup> innocent translation on 5000 yen,<sup>10)</sup> which is, or was, a very different thing. I know of a man who thought he had a grievance because in a case like this he did not find out the difference till too late.

Thanks for what you say about Manchester.<sup>6</sup> It is attractive. I think I shall go.

So glad you have got to know Birch:<sup>7</sup> I wish [I]<sup>8</sup> had: I took a fancy to him.

Yours in almighty haste

Alfred Marshall

As to counsellor how about some retired official e.g. Sir T.H.F.<sup>9</sup>

# 上記翻刻・注 (1, 2, 3……) については、以下を利用している。また、注 1), 2), 3)……については、井上の注である。

Whitaker, J.K.(ed.) *The Correspondence of Alfred Marshall, Economist*, 3vols., 1996 (vol.1, pp.247-48).

1 封筒[表]には 'Gurensy AU 9 87' の消印がおされ、[最終行の] 追伸が封筒 [裏] に書かれている。

2 ジェームス・ステュアートは、政府経済顧問および、もしくは経済学教師を年俸 1,000 ポンドで探

してほしいとの依頼を日本政府から受けた。ステュアートはこの問題をフォックスウェルに相談し、さらにフォックスウェルはマーシャルにアドバイスを求めた。フォックスウェル自身は多少なりとも心動かされたことについては、例えば、[J.N.] Keynes's *Diaries* [筆者未見：Cambridge University Library, Add 7831-58, covering 1874-1908] の 1887 年 8 月 28 日の記述を参照のこと。[従って、フォックスウェルは、条件によっては、この来日要請に応えることに心動かされたことになる。それを示すのが、益田のフォックスウェル宛 Letter 【6】注 4) および 【8】の追伸である。ところで、ステュアートに接触した日本政府関係者が誰であるかは不明である。]

3 マーシャルの茶目っ気か。

4 添田寿一は、日本の銀行家、政治家で、ケンブリッジ大学で「カレッジに所属しない学生」として 1885 年から 7 年まで学び、ケンブリッジ経済学クラブ (Cambridge Economic Club) に所属し、マーシャルの影響下にあった。

5 これら 3 人はすべてマーシャルの影響下にあった。L.L.F.R. プライスはオックスフォード時代の、W.R. ソーリーと S.M. レザースはケンブリッジ時代の学生であり、この時期プライスとソーリーはともにトインビー・トラストの講師 (lecture) であった。

6 イギリス科学促進協会の 1887 年年次大会<sup>11)</sup> はこの日 [Aug 27, 1887] からマンチェスターで開催された。

7 おそらく John W. Birch (1825-97) であろう。彼は、イングランド銀行総裁 (1879-81) で「金・銀委員会 Gold and Silver Commission」の委員の一人であった。

8 明確に “I” の一字が省略されている。

9 ファー (Thomas Henry Farrer) 卿のことである。[なお、この最終行は、封筒裏に書かれている。]

1) 封筒表には、以下の宛名・住所が書かれている。

H. S. Foxwell Esq. / St John's College / Cambridge

その上に、他の筆跡により赤字で Japan と書かれている。

2) Goschen, Gorge Joachin (1831-1907) は、イギリスの政治家・銀行家。オックスフォード大学で学び、イングランド銀行取締役 (1858-65)、自由党から庶民院に入り、第二次 J. ラッセル内閣の副商相 (65-66)、第一次グラッドストーン内閣の救貧院総裁 (68-71)、海相 (65-66)。自治法案に反対して自由統一党へ移籍し、党の違いを超えて第二次ソールズベリ内閣の蔵相 (87-92) となり、財政状況改善に成功した (岩波書店辞典編集部 [2013] 981 頁)。1903 年オックスフォード大学総長 (-07) となった。著書に *Theory of the Foreign Exchange* (1861) がある (Blaug, M. and Sturges, P. [1983] pp.138-39)。

3) Giffen, Robert (1837-1910) は、イギリスの官僚・経済学者。ジャーナリストとして *Globe* 誌や *Fortnightly Review* 誌で働き、W. バジヨットの下で *The Economist* 誌の副編集長を務める一方、王立経済学会の設立にかかわり、王立統計協会でも活躍するなど、経済理論と統計学を結びつけた先駆者の一人で、自由貿易主義者であった。彼の名が付いた「ギッフエン財」、「ギッフエン・パラドックス」はマーシャルによって広められた (岩波書店辞典編集部 [2013] 981 頁)。著書に *Stock Exchange Securities* (1877), *Essays in Finance*, 1st series (1880), 2nd series (1886) などがある (M. Blaug and Sturges, P. [1983] pp.133-34)。

4) Nicholson, Joseph Shield (1850-1927) は、イギリスの経済学者。ユニヴァーシティ・カレッ

- ジ・ロンドンで学び、ケンブリッジ大学で科学博士 (Doctor of Science) を取得。エディンバラ大学の経済学教授 (1880-1925) を務めた (岩波書店辞典編集部 [2013] 1953 頁)。著書に歴史学的方法と数理的方法をも取り入れた *Principles of Political Economy* (3vols., 1893-1901) の他に、*Money and Monetary Problems* (1888) がある (Blaug, M. and Sturges, P. [1983], p.285)。
- 5) Palgrave, Robert Harry Inglis (1827-1919) は、イギリスの銀行家で *The Economist* の編集者 (1877-83) で、1882 年に王立経済学会のフェローに選出され、1883 年のイギリス科学促進協会 F 部門 (経済学科学・統計学) の議長に選出された。著書に *Notes on Banking in Great Britain, Ireland, Sweden, Denmark and Hamburg* (1872) や *Dictionary of Political Economy*, 3 vols. (1894-1908, *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*, 8 vols.1987) がある (Blaug, M. and Sturges, P. [1983] p.295)。
- 6) Sorley, William Ritchie (1855-1935) は、エディンバラ大学、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジとベルリン大学で哲学と神学を学ぶ。カーディフ大学の論理学および哲学教授 (1888-94)、アバディーン大学 (1894-1900) とケンブリッジ大学の哲学のナイトブリッジ教授 (1900-33) を務めた。この時期、彼はトインビー・トラストの講師 (lecturer) であった (岩波書店辞典編集部 [2013] 1524 頁、Whitaker, J.K. [1996] vol.1,p.248)。著書に *A History of British Philosophy to 1900* (1920) がある。
- 7) Price, Langford Lovell Frederick Rice (1862-1950) は、オックスフォード大学のマーシャルの学生で、1885 年からトインビー・トラスト講師、1907 年オックスフォード大学経済史講師であった (経済学史学会 [2000] 334 頁、Whitaker, J.K. [1996] vol.1, p.248)。著書に *Industrial Peace* (1887), *Economic Science and Practice* (1896) がある。
- 8) Leathers, Stanley Mordaunt (1861-1938) は、1886 年からケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジのフェローで、1903 年までケンブリッジ大学の歴史学の講師を務め、国家公務員任用委員会 (Civil Service Commission) に入った。1919 年に卿に叙された (Whitaker, J.K. [1996] vol.1, p.205)。
- 9) Letter 【4】の注 7) を参照のこと。
- 10) 金本位制度下であって、1 ポンドは 9 円 76 銭 3 厘であったが、1880 年 7 月には、1 ポンド 5 円となった。渡辺修次郎はその邦訳『日奔氏経済初学』(1884) において、この為替で邦訳をしている (井上琢智 [2006] 153 頁、注 8)。

私塾商法講義所から東京府立商法講習所となり、その委員の一人であった渋沢栄一の雇用として採用された明治 9 (1876) 年のホイットニーの給与は年俸 2,000 円であった。また、東京大学でアーネスト・フォックスウェルの前任者であったエゲルト (Letter 【8】注 2) の月給は 1 円銀貨 370 円、宿料日本紙幣 40 円で、1889 (明治 22) 年 3 月 1 日から 400 円に増加された。宿料を含め 1 ヶ月 410 円なので、年俸で 4,929 円となり、ここで提示された年俸は、このエゲルトとほぼ同じ額である (ユネスコ東アジア文化研究センター編 [1975] 407、236 頁)。

なお、エゲルトの負担は、授業時数 1 日 4 時間内で、明治 23 年 1 月より大蔵省顧問を兼任した。明治 19 (1886) 年当時の内閣総理大臣の年俸は 9,600 円で、明治 14 年の東京の巡査の初任給は月額 6 円であった (週刊朝日編 [1981] 203、93 頁)。また、1880 (明治 23) 年の同校の卒業生の初任給は、それまでの 40 円から帝国大学出身者の初任給と同じ 50 円に増額されたが、その実現には矢野二郎が「百方奔走」したという (酒井龍男 [1925] 24 頁)。

- 11) イギリス科学促進協会 F 部門（経済科学・統計学）は、9 月 1 日に開催され、9 月 7 日に閉会された。9 月 6 日には L. ウルラスの「英印貨幣問題の解決について “On the Solution of the Anglo-Indian Monetary Problem”」が報告されている（*Report of the Fifty-Seventh Meeting of the British Association for the Advancement of Science*, 1888, pp.849-51）。マーシャルは「例えば、1886 年 7 月 [17 日] にフォックスウェルへ書簡を送り、過剰生産に関する論文をイギリス [科学促進] 協会の大会で報告しようと考えたが、『[経済学] 原理』の仕事をしていただけ出来なくなった。1887 年 8 月 22 日の書簡で、ガンジー島でのバカンスが楽しく、著述が乗っていたため、汚らしいマンチェスターでのイギリス [科学促進] 協会の大会へ出席する気がなくなった。メンガーやベーム＝バヴェルクに会え、マンチェスターの工場を訪問できるという誘惑があったにもかかわらずである（Groenewegen, Peter [1995] pp.458, 488 < 17 July 1886 (Foxwell Papers, Whitaker, J.K. [1996] vol.1, p.212 ; 21 July 1887 (Foxwell Papers, Whitaker, J.K. [1996] vol.1, p.246 [グレーネベゲン [1995] の注 [p.488 n.64] でウイッテカが 21 日と翻刻した日付を 31 日と翻刻もしくは誤記している] ; 22 August 1887 (Foxwell Papers, Whitaker, J.K. [1996] vol.1, pp.248-49 >）。
- 12) この封筒の中に “K. MASUDA / JAPAN” の名刺が同封されており、その裏に鉛筆で以下の名前が書かれている。  
[J.E.] Thorold Rogers [1823-90] / [W.] Cunningham / [J.E.C.] Munro / [W.R.] Sorley / Prof. [J.S.] Nicholson / Alf. Milner [1854-1925] / Prof. [H.S.] Foxwell // [S.M.] Leathers / [L.L.F.R.] Price // [G.H.] Murray [1849-1936] / Talbot Ajar / Alt Thempson (スラッシュは改行を、2 重スラッシュは、何らかの基準に従って分類するための 2 重の横線を示す)。

Letter [6]<sup>1)</sup> 1887 年 9 月 6 日

MITSUI & C<sup>o</sup>

1 *Crosby Square*

TELEPHONE N<sup>o</sup>. 4162

*London* 6th Sept[.] 1887

TELEGRAPHIC ADDRESS,

*E.G.*

“MITSUI, LONDON.”

Profess[o]<sup>r</sup> Foxwell

Dear sir

Many thanks for your note. I am very sorry I was unable to see you in Manchester.<sup>2)</sup> I have written to you to Manchester to day and have sent my representative to see you. I have to thank you very much for your

kind exertions in making enquiries for me different gentlemen. It is really very kind of you and I shall not fail to report to Viscount Mori Minister of Public Instruction.<sup>3)</sup>

I am very glad to know you want to go to Japan yourself on conditions.<sup>4)</sup> It is very fortunate for our country if you will give assistance to our welfare. Of course I have no authority to agree to your conditions, but on my return to Japan I would bring before the proper authority, confidentially of course, and do my best to come to your terms. Meanwhile I shall be much obliged if you will enquire M<sup>r</sup>. Cunningham<sup>5)</sup> whether he would accept. This is what I ~~wish~~<sup>6)</sup> have to ask your kind trouble as I am requested to find out professor for Commercial College. Secondary thing of two positions being what I wish my self as well as my friends here to recommend the Government.

As to your idea, I will write or wire you as soon as I can, I will keep what you have expressed to me very confidential.

Thanking you again for your kindness.

I remain

Yours very faithfully

T. Masuda

1) 封筒表には、以下の宛名・住所が書かれている。

Mitsui & C<sup>o</sup> / Prof. H. S. Foxwell / c/o A H Midwood Esq / Scotcroft / Didsbury  
/ Manchester  
St Johns College / Cambridge

封筒裏には、以下の差し出し人・住所が書かれている。

**MITSUI & C<sup>o</sup> / 1, CROSBY SQUARE / LONDON, E.C.**

2) 9月1日に開催され、9月7日に閉会したイギリス科学振興協会 F 部門（経済科学・統計学）の年次大会に出席するフォックスウェルに会うつもりであった。益田は「明治 20 (1887) 年 3 月 4 日……午後 4 時新橋発社長 [益田] 欧行、社長夫婦、農商務省分析課長高峰謙吉、日報社関直彦、三井高保、……午後 11 時乗船」し渡英したが、その目的の「第一が、米の輸出のことを調べる」ことであった。その米は「ヨーロッパで米を使うのは食うためでなく、マンチェスターその他の機業者が、スターチ即ち糸に糊をする材料に使うのである」（長井実編 [1988] 186-87

頁)。益田や同社の渡辺専次郎のマンチェスター行きは、商用のためであり、その機会にフォックスウェルと会い、政府経済顧問・お雇い教師の推薦を依頼することであった。

なお、フォックスウェルと会えなかったことを詫げる渡辺専次郎の書簡がこの封筒の中に同封されている。その内容は以下の通りである。

**Letter [6-1] 1895 年 6 月 19 日**

[ホテルの写真]

**The Queens Hotel, Manchester**

**London address**

1 Crosby Square

E.C.

Sept. 7<sup>th</sup>, [18]'87.

Dear Sir,

I have called on you at the F. Section and also at the Owen's College this afternoon but were unable to find you out. I have to leave for town by 5.15 P.M. train.

I inclose a letter of introduction and shall take it a great favour if you would make an appointment to see me<sup>2-1)</sup> on some other day in London.

Masuda is leaving this country on 10<sup>th</sup> inst[ant]. and I shall be at Liverpool on 9<sup>th</sup>. Should you be here still on that day I shall be glad to call on you and communicate any message to him before he leaves.

I remain Dear Sir

Yours faithfully

S. Watanabe

Proffessor Foxwell

Manchester

2-1) この“me”の挿入は、渡辺専次郎によるものである。渡辺については Letter 【7】注 3)を参照のこと。

3) この時期、森有礼は文部大臣(明治 18 [1885] 年 12 月 22 日～22 [1889] 年 2 月 11 日)であった。この 1887 (明治 20) 年 9 月 6 日付け書簡は、高等商業学校と改称される直前に出されたものである。これを考えると、東京府庁所管商法講義所時代に東京会議所議員として、さら

に農商務省管轄の東京商業学校（Commercial School at Tokio）の校務商議委員としてこの学校の運営にかかわってきた益田が、高等商業学校（Commercial College）へ改組（1887年10月5日）される直前に、東京商業学校教師の推薦をフォックスウェルに依頼するためのものであった。ただ、フォックスウェルの採用を承認する権限は文部省にあり、自分にはないことをこの書簡は明記している。

益田とともに農商務省時代の東京商業学校の校務商議委員であった富田鉄之助（1835-1916）は、在米時代、ホイットニーが経営する上記学校で学んでいる。『クララの明治日記』にはしばしば富田が登場する。

- 4) Letter 【5】の注2でウイットテーカーは「フォックスウェル自身は多少なりとも心動かされた」と書いたが、この文章は「条件」を模索していた証拠であろう。
- 5) このカニングムはおそらく Cunningham, William (1849-1919) であろう。彼は、1873年ケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジで学士号を取得し、76年に修士号、84年に神学士、89年に神学博士を取得した（Clark, J.W. [1902] p.150）。ケンブリッジ大学の「公開講座」の講師（1874-78）、ケンブリッジ大学講師・フェロー（1878-91）、ロンドン大学の経済学教授（1891-7）、ハーバード大学講師（1899, 1914）をも務めた。益田は、当時「公開講座」の講師でフェローであったフォックスウェルに政府経済顧問・東京商業学校〔Commercial College〕の教師就任の声をかけていたことになる。Letter 【4】でも要請されているように、“Commercial History and about the actual facts banking or of English Commerce”を担当科目と考えていた東京商業学校にとって、カニングムは適任者であった。マーシャルは学生の一人であったカニングムについて「ケンブリッジの同僚たちが一番理解しにくく、……分析に対する彼の全般的な蔑視であった」と評価し、さらに「マーシャルと〔学生の一人であった〕フォックスウェルとの間には友情のきずながあって、マーシャルはフォックスウェルとカニングムとを同列に置いたことは一度もない」（Keynes, J.M. [1980] 359頁）という。
- 6) この“will”の削除と“have”への変更は、益田によるものである。

Letter 【7】<sup>1)</sup> 1887年9月6日

6th sept 1887

TELEPHONE N<sup>o</sup> 4162.

1, Crosby Square,  
London. E.C.

Professor Foxwell

Dear Sir

I am very sorry I was unable to meet you at Manchester.<sup>2)</sup> I have now the pleasure to introduce you [to] Mr. Watanabe,<sup>3)</sup> now staying at

Manchester, representative of our house in London.

Please talk with him on the subject just as you speak to me, any confidential matter as well.

I am very sorry I cannot be present in Manchester again to see you as I have to leave here very soon. Should, however, my appearance is necessary I can drop in on the<sup>4)</sup> my way to Liverpool on the 9<sup>th</sup> inst.

Kindly see Watanabe and tell me your views.

With respect  
I remain  
Yours faithfully  
T. Masuda

1) 封筒には、以下の宛名・住所が書かれている。

Mitsui & Co. / Prof. H. S. Foxwell / F. section British Association / Manchester / 1887

なお、この封筒には切手が貼られていないことを考えると、投函されず、三井物産の支配人渡辺専次郎からフォックスウェルに手渡されたと思われる。また、この封筒裏には、以下のように印刷されている。

**MITSUI & Co. / 1, CROSBY SQUARE, / LONDON.E.C.**

2) Letter 【6】の注 2) を参照のこと。

3) 渡辺専次郎 (1860-1916) は、横浜生まれ。商法講義所に入学し、高等商業学校を卒業後、同校校長の矢野二郎の紹介で益田孝の三井物産に明治 12 (1879) 年 7 月に入社し、明治 15 (1882) 年 3 月に選ばれてロンドン支店に勤め、明治 18 (1885) 年 8 月には副支配人、明治 19 (1886) 年 5 月には支配人となり、明治 28 (1895) 年 12 月に理事となり、ロンドン支店長を兼ねた (長井実編 [1988] 120 頁、『大正過去帳』105 頁、魁堂生「渡辺専次郎を論ず」実業之日本社、[1903] 159-62 頁)。

4) この “the” の削除と “my” への変更は、益田によるものである。

**Letter 【8】<sup>1)</sup> 1895 年 6 月 19 日**

Finame Department  
Tokio, Japan  
June 19<sup>th</sup>, 1895.

Dear Prof. Foxwell,

Please excuse my silence for a long time. I must congratulate you for your success in your economical investigations. At present the peace is to reign again here, if no new difficulties arise; and the people are busy in making preparations for the restoration of normal conditions.

I have now one thing to bring forward to you and beg your consideration. In our Imperial University, the only University of the state establishment and the idea of which may be gathered from the calender sent with this letter by book-post, the professorship of economics is vacant.

It is the urgent wishes of those in and out of the University that this chair (formerly occupied by late Prof. Eggert,<sup>2)</sup> the author of the “Land Reform in Japan”<sup>3)</sup> etc.) may be occupied by an able and influential economist like yourself. If you take interest in our country especially in furthering the cause of economic study and are inclined to occupy the high and influential position of becoming “the authority” in economics in Japan will you kindly accept our invitation according to the conditions briefly enumerated in the enclosed draft of contract, the terms, salaries and traveling expenses in it being already decided by the parliamentary grant. The salary may perhaps be increased to five hundred yen per month afterwards, and the contract may be renewed, if the parliamentary grant be obtained. Besides the Shioko-Sodankai,<sup>4)</sup> a body consisting of influential city-men, have decided to ask you to give them occasional lectures and to form a subscription of one hundred yen per month as the fee for the lecture. In case you are inclined to come please telegraph “Yes”. With the receipt of your answer the formal entrance into contract will be concluded through the hand of His Excellency Kato,<sup>5)</sup> our Minister in London. But if you are unable to come please send “No” by telegraph. The telegraphic expenses will be paid back to you by the University. These I am requested by the President of the University to ask in a private capacity, on account of my

having the honour of knowing you. As your student and acquaintance I beseech you by accepting our hearty invitation, to spread among us useful economical knowledge to establish an economic school of your own in our country, and to help the progress of the economical idea in the East. As for the University, — being the centre and climax of education — I assure you that it will satisfy you, as the President is a kind gentleman, the student are numerous, the graduates are employed in influential position, — our present Minister in London, His Excellency Kato being one of the graduates and to whom you can refer on any points of doubts or which are not made clear in this letter — and the establishment is old, esteemed, and of firm basis corresponding to your Cambridge or Oxford.

Waiting your favourable answer and wishing your welfare, and in this being joined by the President of the University.<sup>6)</sup>

I remain,  
Faithfully Yours  
J. Soyeda

P.S. If your conditional acceptance be obtainable please let us know the condition and if it were on the point of salary please telegraph with the word “yes” the amount of the sum necessary per month, for instance in such a way as “Yes (Six) hundred.” This I add as there is a hope of inducing the Bankers Association<sup>7)</sup> to join the plan of the Shioko - Sodankai, thereby increasing the fee for your lecture. I hope these considerations will be taken as the proof that your coming are expected not only by the University but also by the commercial community.

<sup>8)</sup>Principal points of Conditions of the engagement of a Professor of Political Economy and Finance.

Subjects for instruction: Political Economy (especially Applied Economy) and Finance.

Salary: Four hundred (400) yen per month payable in Japanese silver yen or its equivalent.

Terms of Contract: From the day after his arrival in Tokyo to the 10<sup>th</sup> day of the 7<sup>th</sup> month of the 32<sup>nd</sup> year of Meiji (July 10<sup>th</sup>, 1899).

Travelling expenses: Six hundred and fifty (650) yen in Japanese silver yen or its equivalent for his coming out and the same sum for his return home[.]

Number of hours for lectures: Number of hours actually required for lectures will be about ten hours a week.

House for residence: He shall be provided with an unfurnished house, free of rent, or at the option of the party of the first part shall receive a sum of forty (40) yen per month in lieu thereof.

Supplementary contract: A supplementary contract shall be made, that, if the Japanese silver yen reckoned according to the Chūwo Kinko's (Bank of Japan) rate of Exchange shall be depreciated below three shillings in English gold sterling, he shall receive an additional sum of as many silver yen as shall be necessary to make one half of his salary (or whole amount in case of the traveling expenses) equivalent in such exchange to what it would be if such exchange stood at three shillings.

<sup>9)</sup>Articles of Agreement between President of the Imperial University of Japan the party of the first part and Mr. [ ] the party of the second part.<sup>10)</sup>

Art. 1 The said Mr. [ ] is hereby appointed Professor of Political Economy and Finance in the College of Law of the Imperial University for the term of [ ], commencing from the date after he has duly informed of his arrival in Tokyo to the party of the first part and ending on the 10<sup>th</sup> day of the 7<sup>th</sup> month of the 32<sup>nd</sup> year of Meiji (July 10<sup>th</sup>,

1899).

Art. 2 The said Mr. [ ] shall receive a sum of six hundred and fifty (650) yen in Japanese silver yen or its equivalent for the traveling expenses of his coming journey.

Art. 3 The said Mr. [ ] shall receive a salary of four hundred (400) yen per each complete calendar month in Japanese silver yen or its equivalent the same to be paid at the end of each month. For any part of a month the salary shall be paid at the above rate according to the number of days.

Art. 4 The said Mr. [ ] shall during the term of his services be provided with an unfurnished house, free of rent, or at the option of the party of the first part shall receive a sum of 40 (40) yen per each complete Calendar month in Japanese paper money in lieu thereof. For any part of a month the rent shall be paid at the above rate according to the number of days.

N.B. It is understood that if a house has been provided for the said Mr. [ ] it shall be kept in proper repair by the party of the first part, but neither changes in the interior structure of any part of the house nor any addition to it shall be made at the request of the party of the second part.

Art. 5 The power to fix hours and order of instruction to be given in the College of Law shall rest with the party of the first part, but the said Mr. [ ] shall in no case be required to teach more than four hours a day nor to teach on Sunday.

Art. 6 For ordinary matters connected with his instruction the said Mr. [ ] shall comply with the directions of the Director of the College of Law.

Art. 7 The said Mr. [ ] shall have the privilege of submitting his

opinions in reference to matters connected with his department of instruction at all times to the party of the first part, with whom the right of final decision shall remain.

Art. 8 If the said Mr. [ ] shall refuse to comply with the regulations of the institution, this engagement may be annulled.

Art. 9 If the said Mr. [ ] shall be unable to perform his duties for a period of forty consecutive days on account of sickness or some event not under his control, then after the expiration of such period and during the continuance of such sickness or event, he shall receive only one half of his salary, and if after a period of three months from the beginning of such sickness or event he shall be still unable to resume his duties, this engagement may be annulled.

Art. 10 If for reasons of his own the said Mr. [ ] shall desire to be released from this engagement before the term of this engagement has expired, a notice of such desire shall be given to the party of the first part at least eight months beforehand, and in such case the party of the first part shall comply with the desire of the party of the second part.

Art. 11 If for reasons of his own the party of the first part shall desire to discontinue the services of the said Mr. [ ] before the term of this engagement has expired, the party of the first part shall have the right to do so by paying him his salary for one half of the unexpired term.

Art. 12 The said Mr. [ ] at the end of this engagement unless his services shall be continued, and also when his services come to an end under the article 9 or 11 or this Contract shall receive a sum of six hundred and fifty (650) yen in Japanese silver yen or its equivalent for the traveling expenses of his return journey, but when his services come to an end under any other articles, the said Mr. [ ] shall

have no right to receive the said traveling expenses.

In witness whereof this engagement has been made and signed in duplicate, a copy to be retained by each of the contracting parties.

Dated at \_\_\_\_\_

- 1) この封筒表には、宛名・住所が以下のように書かれている。  
Prof. H.S. Foxwell / St. Johns College / Cambridge / England  
なお、この封筒表の宛名・住所の上には、**On Government Service**, その下には、**Finance Department, / TOKIO, JAPAN** と印刷され、手書きで、declined, Registeredと書かれている。また、スタンプ等については以下の通りである。  
[red stanp] R Tokio, Japan/ No. 58 / [light black postmark] Yokohama 22 Jun 95 / [black postmark] Tokio 21 Jun 95 Japan / [red postmark]...95 London 6 [postmarks over stamps][illegible]  
また、日本語で「書留 参参四」と書かれている。  
封筒裏には、6 枚の切手が貼られ、[right corner postmark] REGISTERED / A / 5 AU 95 / JAPAN が押されている
- 2) Eggert, Udo (1848-93) はプロイセン生まれで、ゲッティンゲン大学等で学び、1875 年、同大学より財政学博士を取得し、1880 年に母校の教員に就任した。1887 年に来日し、田尻稲次郎の後任として帝国大学法科大学講師に就任し財政学、理財学（経済学）、統計学を講じ、演習を担当し（1893 年 2 月）、大蔵省顧問を兼任した。任期満了後、帰国直前鎌倉で病死した。国内市場としての農村の役割を重視し、資本主義的農業への道を提唱した。  
東京大学での経済学では、まず、1878 年 8 月フェノロサが政治学と経済学の講師専任となり、次いで 1882 年 4 月にラートゲン (Rathgen, Karl, 1855-1921, ドイツ人) が講師専任として統計学、国法学、行政学を 1890 年 4 月まで教え、その後このエッグルトが雇用された。その後、1893 年 11 月にはウェンクステルン (Wenckstern, Adolf von, 1862-1917, ドイツ人) が経済学・財政学および統計学を 1895 年 3 月まで担当した。従って、この教師募集は、エッグルトの任期満了し、ウェンクステルンが任期満了前に退職し、経済学・財政学担当の外国人教師が不在になったために行われたものであった（経済学史学会 [2000] 45 頁、東京大学経済学部 [1975] 1194-97 頁）。
- 3) *Land Reform in Japan, especially based on the Development of Credit Association*, 1890 (織田一訳『日本進農策』)。
- 4) Shioko-Sodankai (商工相談会) とは、商工会議所の一つの組織であろうか。当時「東京実業家相談会」（『渋沢伝記資料』第 23 巻 22-26 頁）が存在するが、この可能性もある。同会は、第二議会解散解散後、「来タルベキ衆議院総選挙ニ際シテ実業家中ヨリ候補者ヲ出ス」ために組織されたものであり、1892 (明治 25) 年 1 月 9 日開催の帝国ホテルの会合で開会の辞を益田孝が読んでいる。
- 5) 加藤高明 (1860-1926) は、明治 22 (1889) 年 11 月から明治 33 (1900) 年 2 月の間、特命全権公使としてロンドン駐留していた。
- 6) この書簡の日付である 1895 (明治 28) 年 6 月 19 日当時の帝国大学総長は浜尾新 (1848- 1925 :

就任は明治 26 年 3 月 30 日。30 年 6 月 22 日から東京帝国大学総長となり、同年 11 月 6 日まで務めた) である。

- 7) Bankers Association とは、東京銀行集会所のことであろうか。
- 8) 以下が契約の要約で添付別紙に書かれている。
- 9) 以下が契約書 (2 頁) の内容で、添付別紙に書かれている。
- 10) 1874 年春、日本に腕足類が多いと聞き日本行きを決心したモース (Edward S. Morse, 1838-1925) は、自費で 1877 (明治 10) 年 6 月、横浜に着いた。18 日、ミシガン大学留学後帰国し、アメリカで面識があった東京大学文学部教授外山正一がモースを訪ね、翌日にも新橋に着いたモースを出迎え、文部省でモースの東京大学招聘の話を持ち出した。その結果、7 月 12 日、東京大学と理学部動物学生理学教師として 2 年間雇用 (任期 1 年、更新 1 度) の契約をした (守屋毅 [1988] 467-69 頁)。その時の契約書 (英文と日本語) のうち、英文の契約書は、以下の契約書の書式はほぼ同じである (守屋毅 [1988] 492-95 頁)。

なお、「御雇外国人教師関係書類」(古文書複製社、マイクロフィルムリール 8 巻、東京大学付属図書館 [1971 年マイクロ撮影・焼付終了]) の中には日本語・英文の書類が含まれていることから考えると、この契約書は少なくとも文部省の正式な書式でお雇い外国人教師の雇用にあたって一般的に使用されたものであろう。なお、「御雇外国人教師関係書類」に含まれている契約書の 13 條 (日本語・英文) で「前文何某君ハ英語ヲ以テ学生ヲ教導すへし」とあることから、英語による授業を廃し邦語を用いることが決定された 1883 (明治 16) 年 4 月以前のものである (東京大学経済学部 [1975] 1195 頁)。

Letter [9]<sup>1)</sup> 1896 年 3 月 20 日

Treasury

Tokio

March 20<sup>th</sup>, 1896

Dear Prof. Foxwell,

Please excuse my long silence. Mr. Hayakawa<sup>2)</sup> is the confidential secretary of the Minister of Finance and councillor of the Treasury, & was once the secretary to the Currency Commission. He now goes to Europe as the comptroller of the Bank of Japan to oversee the indemnity fund & to observe the monetary, commercial, & financial state of things abroad.

Any assistance kindly given by you will be of great benefit to him, [to] myself, & to our country.

If anything were to be asked in the line of our economy & finance he is the best man.

Please accept my best compliments & highest respect.

I remain

Obediently yours

J. Soyeda<sup>3)</sup>

P.S.

I intend to call on your brother<sup>4)</sup> before long, and thank you again for the trouble you took about the affair.

1) 封筒表には、以下の宛名・住所が書かれている。

Prof. H.S.Foxwell / London University / or / St. John's College / Cambridge

なお、この封筒には切手が貼られていないため、投函されたものではないが、便宜上 Letter と表記する。また、封筒表には、異なる筆跡で、以下のコメントが書かれている。

Soyeda's Letter, introducing Hayakawa / 1896。従って添田が早川に手渡した紹介状であろう。

2) 早川千吉郎 (1863-1922) は、金沢市出身で、明治 20 (1887) 年、東京帝国大学法科大学政治学科卒業。明治 22 (1889) 年、同大学院農政学研究所修了。明治 23 (1890) 年 1 月、大蔵省入省。官房第一課長時代の明治 29 (1896) 年 4 月イギリスへ出張し、滞英中 30 年 8 月に大蔵大臣秘書官に就任し、10 月に帰国した。ただ、秦邦彦『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』(186 頁)によれば、この書簡で書かれている日本銀行監理官 [the comptroller of the Bank of Japan] に就任したのは明治 32 (1889) 年 9 月とされている。

3) この書簡の早川千吉郎や Letter 【13】の阪谷芳郎に見られるように、添田はフォックスウェルに、松村謙三、大隈重信、桑田熊蔵、Murata,T.、Ota,S.、Shiokawa,S. (Bank of Japan) を紹介している。

4) 追伸で、H.S. フォックスウェルの弟アーネストは、(東京)帝国大学 (1896 年 4 月～99 年 7 月) で経済学・財政学を 1896 年 9 月から講義 (雇用契約の開始は、4 月である) するために来日 (来日日は不明) したが、添田はそのアーネストに「それほど経たないうちに会いに行くつもりである」と表明している。

【10】<sup>1)</sup> 1896 年 6 月 21 日

2, THE CHESTNUTS,  
BRANCH HILL,

HAMPSTEAD, N.W.

21<sup>st</sup> June [1896]

Dear M<sup>r</sup> Foxwell,

I have just been told by a Cambridge friend of Herbert's<sup>2)</sup> who is staying with us, that he had heard you had accepted a professorship of Economics in Japan!<sup>3)</sup> I wonder if it is really true, it would be such a complete change in your life that I can hardly realize it, and I was greatly surprised on hearing the news. I hope you do not mind my writing to ask you about it, for I have known you now for so many years, and take a warm interest in all that concerns you. Japan does not seem nearly as far away as it used to do, so many English people travel there now, still it would be a very great change for you, and what would become of all your books!

We have been much pleased at Herbert getting a 1<sup>st</sup> class in his Tripos, and he has come home looking well and not at all overworked.

Believe me

Most sincerely yours

Harriet A. Jevons

1) 封筒表には、以下の宛名・住所が書かれている。

H.S. Foxwell Esq. / St. John's College /Cambridge

2) この Herbert は、W.S. Jevons (1835-82) とその妻 (Harriet Ann Jevons, 1838-1910) との間に生まれた長男 Herbert Stanley Jevons (1875-1955) である。彼は、B.Sc. と M.A. をロンドン大学で取得し、1894年のミケルマスにケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジに入学し、1897年 B.A. を取得した (Clark, J.W. [1902] p.329)。この書簡によれば、ハーバードがトライボスで第一等級を獲得したことになる。卒業後の1902年にシドニー大学の地質学の講師となったが、その後、父と同様、経済学研究に転じ (R.D.Collison Black and Rosamond Könekamp [1972] vol. I, p.114,n.2)、Univ. Wales, Cardiff の経済学講師・教授を務め (1905-11)、Univ. Allahabad, India の経済学教授を務め (1914-23)、最後に、ビルマのダンゲン大学 (Univ. Rangoon, Burma) に勤務した (1923-30)。著書に *Essays on Economics* (1905)、*The British Coal Trade* (1915)、*Money, Banking and Exchange in India* (1922) などがある (Blaug, M. and Sturges, P. [1983] p.187)。

2) 1881年5月7日、著作業に専念するために退職した (1880) W.S. ジェヴォンズの後任とし

て、フォックスウェルはユニヴァーシティ・カレッジ教授に就任 (-1922) し、同時に、統計学のニューマーチ講座職にも就いた。1882 年 8 月 13 日にジェヴォンズが死去し、彼の論文集『通貨および金融の研究』の編集を担うこととなり、フォックスウェルはその序文を書いて、1884 年に出版したが、ジェヴォンズ夫人に依頼されていた遺稿『経済学原理』の編集を開始したものの完成することができず、その編集がヒッグス (Henry Higgs, 1864-1940) に委ねられ、1905 年に出版された。

フォックスウェルの日本の大学教師就任の噂に対するこのジェヴォンズ夫人の書簡で示された「驚き」は、依頼した仕事にさらに遅延することへの心配でもあったであろう。例えば、ケインズによれば「ジェヴォンズ夫人は不快の念を隠さなかったが、この書物 [『経済学原理』] は長い間、校正刷りのままで、ついに完成しなかった、フォックスウェルの予定された序文を待っていた。……『クォーターリー・ジャーナル・オブ・エコノミクス』1887 年 10 月号の「覚え書きおよび記録」の中に、印刷中で、その冬出版予定と発表されていたのである」(Keynes, J.M. [1980] 366 頁)。この噂は、フォックスウェルの弟アーネストの東京大学教師就任と間違っているものと考えられる。もっとも、フォックスウェル自身が来日し、お雇い教師・政府経済顧問になる気持ちになったことがあることを考えると、必ずしも間違いでなかった。

Letter [11]<sup>1)</sup> 1898 年 3 月 24 日

Metropole Hotel<sup>2)</sup> Tokyo

24 March 1898

Dear Herbert

Thanks for your long letter full of news — there is nothing in the nature of news on this side. The various nations seem to be waiting serenely to see what will turn up when the sun comes out in a week or two, when Russia is expected to withdraw.<sup>3)</sup> The Japs are not remarkably excited, because they have a firm conviction that England will be forced to do the fighting, & that the upshot must be in their favour. It is amusing to live in a hotel like this & [to] see 9 or 10 nationalities (members of 5 legations) chatting & eating together every day, discussing events concerning which their respective governments are supposed to be at daggers drawn. It is curious how every one likes the Spanish or individuals, though the nation cuts such a mean figure. We have 3 of the Spanish leg[at]io<sup>n</sup> living in

the hotel, 3<sup>4)</sup> 5 French I[n]do[China]., the Brazilian Sec[retar]y, [the] Italian military attaché, [the] English mil[itary]. attaché (Col. Hemming), & other subordinates. There are also Americans, many Germans, & an Austrian. I am the only Englishman besides Hemming. All these are residents like me —& we have only room for 2 or 3 tourists.<sup>5)</sup>

There is a man Archer<sup>6)</sup> sailing tomorrow, who will call on you early in June. He is brother of Archer the dramatic critic, & has been some years in Japan, lately manager of Kobe branch of Chartered Bank of India, Austr[alia] and China.<sup>7)</sup>

He is a very nice fellow, & during the year he is at home wants to<sup>8)</sup> do as much Economics as possible, & get some certificate of knowledge to bring back here with him. I should think the School of Economics<sup>9)</sup> would suit him.

Your friend Hayakawa<sup>10)</sup> has never come near me since his return. This is typical Japanese behavior: having got what they want, they never trouble about ordinary courtesies of life. A man who has lived here 30 years said to me yesterday that the word “gratitude” was unknown to the Japanese brain. This is a result of centuries of the severest feudal system ever known, when every action was prescribed from without, & nothing left to a man’s own spontaneous individuality. This also is why they learn so quickly; they swallow their teacher’s opinions just as they used to obey his<sup>11)</sup> their daimyo’s commands.

I have been having a nice little row with 50 or 60 of my students, & about a fortnight ago refused to lecture to them anymore —& have carried this out. The University Council is consequently much harassed, between the students & myself: they dread punishing the former, & they do not want me to resign, which I say must come to pass unless some authority can compel them to behave with common decency. The correspondence has been rather amusing, especially one phrase which nearly drew tears from the eyes of my

Director. I said “it is a proverb among foreigners that in Japan “the tail wags the dog,”<sup>12)</sup> but I need hardly say that when I accepted my post here I had no intention of agreeing to any procedures so opposed to physiology or common sense – not to mention common courtesy.”

He said with great earnestness, “such thing can never be in Japan: we must do all to forbid such result.”

The students have been getting very bad lately all over Tokyo, & on the day I sent in my ultimatum the Emperor had an interview with the Chief of Police, asking him one or two Socratic questions as to whether it was a fact that foreigners were insulted in the streets of the capital. The Chief said he believed it was so, in the case of a few coolies or students. This pleased us, because we always bracket those 2 classes.

By the way, I am sorry I gave you the impression that I could speak Japanese. I only know the small phrases required for food, travelling, etc. I can write the Jap. characters (not the Chinese), so that I can send a telegram in native form – which few English residents can do. But I am just going to have some regular lessons, & see if I can get a little grip of conversation.

I almost wonder you don't take a house at Hitchin:<sup>13)</sup> I think some nice people live there, & it is such a convenient  $\frac{1}{2}$  way house.

I enclose a cutting re the celebration of 30<sup>th</sup> anniversary of the Revolution,<sup>14)</sup> when the feudal system was abolished & the Emperor came out into daylight, after 500 years seclusion amongst women.

This winter has been very long: every tourist who steps ashore is amazed, expecting to find sparkling sunshine, instead of snow & sleet. However, it has been very dry on the whole, about 5 in. of rain in 4 months. In summer we have had 20 in[stant]. in one day.

Please give my thanks to Larmor, Main, & Stevens<sup>15)</sup> for their letters recently arrived. I hope Emmie<sup>16)</sup> is getting stronger & heavier. Arthur<sup>17)</sup>

seems to be having a good haul just now: I hope it will continue.

Remember me to Swan & M<sup>rs</sup>. Swan.<sup>18)</sup>

Ernest<sup>19)</sup>

P.S.<sup>20)</sup>

I like the signet ring very much.

- 1) 封筒表には、以下の宛名・住所が書かれている。

H. S. Foxwell, Esq. / St. John's College / Cambridge / England

その上に「英国行」と書かれている。

なお、この書簡には日本で発行されていた新聞（新聞名不詳）の“*Our Capital's Birthday*”と題する切り抜き 1 葉が同封されている。この切り抜きの裏の内容については、注 3)・4) を参照のこと。

- 2) Metropole Hotel は、正式には“*The Hotel Metropole*”である。横浜開港後まもなく日本で最初のクラブ“*Yokohama United Club*”（最初の名称は“*United Service Club*”）が関内居留地 5 番にあり、その敷地内（5 番 B）に会員とその紹介を得た客のためのホテルが“*The Club Hotel, Ltd.*”として、1884（明治 17）年創業され、1889（明治 22）年、横浜の商人を役員とする株式会社組織となった。1890（明治 23）年、東京築地にあったアメリカ公使館が赤坂に移転し、それにともないその建物と敷地（居留地 1 番<明石町 1 番地>：現・聖路加病院）の譲渡を受け、改修後、横浜の“*The Club Hotel, Ltd.*”の“*The Tokyo Branch*”として、客室 20 室のホテルとして創業された。1893（明治 26）年になり、“*The Hotel Metropole*”と改称された。おそらくロンドンのホワイトホール・プレース（Whitehall Place）にあるホテルで 1892（明治 25）年以降毎年ロンドン日本協会の年次晩餐会が開催されていた“*The Hotel Metropole*”の名前を借りたものと思われる。このホテルは「明治時代の後半に東京築地にあったホテルで、西洋人の経営で食事が美味しく、夏には海風が涼しいというので、評判の良いホテルであった（長岡祥三 [2002]「ホテル・メトロポール略史」75-83 頁。川崎晴朗 [2002]『築地外国人居留地』133-48 頁）。その後、1905（明治 38）年、日本人の手に渡り、日露戦争勝利のため外国人の旅行の増加を見込んで、株式会社として発足したが、計画が頓挫し、帝国ホテルの経営へ移った。1909（明治 42）年閉店され、売却された（大鹿武 [1987] 98 頁）。
- 3) 1897 年 9 月 6 日、朝鮮政府はロシア軍人 14 人を軍事顧問として採用し、10 月 6 日、ロシア公使は、朝鮮にイギリス人総稅務司ブラウンの解雇とロシア人の雇用を要求した。他方、1 月 8 日、イギリスは清国への借款の条件として、ビルマ・揚子江間の鉄道敷設、揚子江沿岸地域の不割譲を要求し、1 月 11 日、清国はイギリスに揚子江沿岸地域の不割譲を承認し、イギリス人を永久總稅務司とすることを約束した。さらに、3 月 3 日、ロシアは清国に大連・旅順の租借を要求し、3 月 27 日には両港租借権（25 年間）と南滿鉄敷設権を獲得するなど、イギリスやロシアの中国・朝鮮などアジアの半植民地化競争が激化していた。なお、同封されている新聞の切り抜き（新聞名は不明）記事には、*Japan Times* および *Jiji* (Soil, March 17) からのこの事件に関する記事と江戸から東京への名称変更（1868 年 9 月<慶応 4 年 7 月>）についての記事が掲載されている。この *Jiji* は福沢諭吉の『時事新報』（1882 年刊行）のことであろうか。

- 4) この「3」の削除と「5」への変更は、アーネストによるものである。
- 5) アーネスト・サトウ (Ernest Mason Satow, 1843-1929) のイギリス公使の時代 (1895-1900) の日記に最初にこのホテルが登場するのは、1899 (明治 32) 年 1 月 18 日で、Miss Edith Divers とフランス公使館付 Le Capitaine Vicomte de Labry の結婚式で、花嫁の父 Edward Divers (1837-1912) は当時帝国大学工科大学の化学教授 (在日: 1873-99: 工部省工学寮・工部大学校で勤務) であった。2 月 4 日にはイギリス法廷弁護士会 (The Inns of Court Association) の創立晩餐会、3 月 27 日にはブラジル公使リスボア主催の晩餐会などについて記載がある (アーネスト サトウ [1991] 198, 206, 239, 242 頁)。
- 6) Archer とは、チャータード銀行の横浜支店次席 (1894, 1897)、神戸支店 (代理店) 長 (1896, 1899) を務めた James Archer である (立脇和夫 [1987] 401-4 頁)。
- 7) チャータード銀行 (Chartered Bank of India, Australia and China) は、1853 年ロンドン本店として設立されたが、株式の振込の遅れや 57 年のセポイの反乱のため、開業は 58 年 2 月であった。日本への進出は、ライバル銀行である香港上海銀行 (Hongkong and Shanghai Banking Corporation <1861>)。設立時の名称は Central Bank of Western India であったが、1867 年 1 月に改称された) よりも 14 年遅い 1880 年で、横浜に支店を置き、神戸への進出は 1895 年であった (立脇和夫 [2002] 6-7 頁)。
- 8) この “to” の追加は、アーネストによるものである。
- 9) London School of Economics and Political Science のことであろう。この LSE についての略史については、木村雄一『LSE 物語—現代イギリス経済学者たちの熱き戦い—』(NTT 出版 2009) を参照のこと。
- 10) Hayakawa については、Letter 【9】の注 2) を参照のこと。早川は明治 29 (1896) 年 4 月イギリスへ出張し、明治 30 (1897) 年 10 月に帰国した。
- 11) この “his” の削除と “their” への変更は、アーネストによるものである。
- 12) “the tail wags the dog” は “The worst dog that in wags his tail” (「鬼も笑顔」) のことであろう。
- 13) ヒッチン [Hitchin] は、イングランド南東部州のハートフォードシャーの北ハートフォードシャーにある町である。この記述によれば、メイとの結婚 (1898 年 7 月) を前に、フォックスウェルはこの地に家を求めようとしたことになるが、「彼はケンブリッジのハーヴェー街に移り、死ぬまでそこに 40 年近く住んでいた」(Keynes, J.M. [1980] 373 頁)。
- 14) 1868 (明治元年) 9 月 3 日 (7 月 17 日) に、江戸が東京と改められた。同封された新聞記事によれば、“Our Capital’s Birthday, Tokyo’s Thirtieth Anniversary” が “The Celebration Committee Care of Kyuchu Club” 主催で開催された。委員長は岡部長 職 (Choshyoku [sic.] Okabe) 子爵、副委員長は渋沢栄一が務めた。岡部は明治 30 年 10 月 12 日東京府知事に就任した。
- 15) Larmor, Main, Stevens については、現在のところ不詳である。
- 16) Emmie は、フォックスウェルの妹で、ジョンソン夫人となった (Keynes, J.M. [1980] 362 頁注 (1))。
- 17) Foxwell, William Arthur (1853-1909) は、フォックスウェルとアーネストの弟で、二人の兄に続いてセント・ジョーンズ・カレッジに入学した。その後医師となり、バーミンガム大学の心臓・肺臓の専門家となった (Keynes, J.M. [1980] 362 頁注 (1)、また、H.C.G. Mattjew

and Brian Harrison [2004] vol. 20, pp.713-14)。

18) Swan, Mrs. Swan については、現在のところ不詳である。

19) アーネストは、高等商業学校からの要請によって 1897 年 6 月 1 日から 98 年 7 月 31 日まで商業経済学を非常勤講師として講義した。高等商業学校校長小山健三が帝国大学浜尾新へ提出した要請書は以下の通りである（「御雇外国人教師関係書類」<古文書複製社、マイクロフィルムリール 8 巻、第 4 リール、東京大学付属総合図書館 [1971 年マイクロ撮影・焼付終了]>）。

「庶第一四〇号

貴学備英国人エルネスト、フォックス / ウエル二本 [明治 30] 年六月一日ヨリ明治三十一年 / 七月三十一日マテ貴学授業ノ余暇ニ / 於テ一週三時宛本校商業経済 / 学授業担任セシムル為メ相備度、右ハ / 貴学ニ於テ御差支無之候哉、此段及 / 御照会候也

明治三十年五月十八日

高等商業学校長 小山健三 [印]

帝国大学総長 浜尾 新殿

なお、小山健三の校長就任は 1895 (明治 28) 年 8 月で、前任者は由布武三郎である。また、浜尾新の総長就任は 1893 (明治 26) 年 3 月で前任者は加藤弘之である。

この「御雇外国人教師関係書類」の中には、浜尾総長宛のアーネストの診断書と詫び状も含まれている。その内容は、以下の通りである。

①診断書

To the President of the Imperial University Tokyo:

Dear Sir,

I beg to certify that Prof. Foxwell is suffering from an attack of Small Pox.

Faithfully yours,

D. Macdonald<sup>19-1)</sup>

4 Tsukiji, Tokyo

February 6<sup>th</sup>, 1897

②詫び状

4 March 1897

Dear Mr. President

I take this first opportunity to thank you for your kind enquiries of 12th February. It is only to-day that I have been allowed to see the letters and cards which came during my illness and I was not allowed to send any message.

I am now out of the sick-room, and am just going for my first walk. I had a very severe and dangerous fever, again. I have been exceedingly sorry to have been so long absent from my duties, but I hope to return within a few days now. My face is still very much marked with red spots which the Doctor says will not disappear until July or August. But there is no longer any danger of infection: the policeman came in yesterday and saw me washed in carbolic solution, and all my sick clothes burnt or carried away.

I have given much trouble to many people. With kind regards

I am yours truly

Ernest Foxwell

Dr. Arata Hamao

19-1) マクドナルト (Davidson Macdonald, 1836-1905) は、ウェスレリアン・メソジスト教会の牧師として伝道に従事しながらトロント大学で医学を学び、1873 (明治 6) 年宣教師として来日。翌年から静岡の賤機舎で御雇教師となる一方、静岡メソジスト教会の基礎を築いた。76 年から乞われて静岡県の御雇医師を務める。一旦休暇帰国した後、79 年再来日し、築地明石町で日本メソジスト築地教会を担当しながら、診療所を開設した。99 年の引退後も滞日し、1904 年に帰国した (日本キリスト教歴史大事典編集委員会 [1988] 1312 頁)。

20) この追伸は、書簡の 1 枚目に書かれている。

Letter [12]<sup>1)</sup> 1910 年 2 月 6 日

Belvedere House, Weymouth

6 Feb. [19]'10

Dear Herbert

I have been stopped from coming up last week because I was suddenly (i.e., in  $\frac{1}{2}$  hr.) knocked over by influenza, & have been in bed most of 8 days: it seems to be going away slowly, but the doctor says I must keep to the bed. I have escaped it since 1905, but the old headache has returned in full force, & cannot be appeased. I am worried about a Prof: [*sic.*] from the Tokyo University,<sup>2)</sup> who arrived at Camb. (42. Eltesley Avenue) on Thursday, after deferring his visit a week till I should be there. His name is Nakashima (R.),<sup>3)</sup> & he was Prof: [*sic.*] of Ethics (a Yale degree) when I was there. He was the man who got 10 of his pupils to translate Sidgwick's<sup>4)</sup> "Methods of Ethics", & having done that, to sell more copies in 5 months than Sidg. had sold in 25 years (1875-1900). I wrote to S. about the work, & he sent a line, and his photo for frontispiece. You might possibly direct him to Cunningham or some other man to have a talk with – & of course he ought to see Mrs. Sidgwick.<sup>5)</sup> He may, for all I know, have arranged his programme beforehand.

I have about 300 papers yet to mark, then the lot is finished, including

the most distant parts of the earth.

I hope the children are well.

Ernest

- 1) 封筒表には、以下の宛名・住所が書かれている。

H.S. Foxwell Esq. / 1. Harvey Road / Cambridge

封筒裏には、ケンブリッジの消印が押されている。

- 2) 1877 (明治 10) 年、東京開成学校と東京医学校を合併し、東京大学が創立されたが、1886 (明治 19) 年の帝国大学令の公布により、帝国大学へと名称を変更され、1897 (明治 30) 年、京都帝国大学の創立により、東京帝国大学へと名称が変更された。従って、1910 年当時の名称はここで書かれている “Tokyo University” ではなく、正しくは “Tokyo Imperial University” である。

- 3) この Nakashima は、中島力造 (1858-1918) である。ミル、スペンサー流の功利主義的思想が優位を占めていたこの時期、T. グリーンの新理想主義倫理学を紹介し、思想界に転換をもたらした。福知山町に生まれ同志社専科で学んだ後、1880 (明治 13) 年ウエストルン・レゾルフ大学に入学し、1884 (明治 17) 年に卒業。1887 (明治 20) 年、イエール大学から神学博士を、1889 (明治 22) 年、哲学博士号を授与され、1892 (明治 25) 年に帝国大学教授となった。著書には『軌近の倫理学』(1896)、『現今の哲学問題』(1900) などがあり、訳書に『シヂェウキック氏倫理学説』(1908)、『グリーン氏倫理学説』(1909)、『スペンサー氏倫理学説』(1909) がある (白井勝美・高村直助・鳥海靖・由井正臣 [2001] 747 頁)。

1898 (明治 31) 年 12 月 25 日 (奥付)、中島力造、山辺知春・太田秀徳共訳『倫理学説批判』(大日本図書) が出版された。この翻訳は *Methods of Ethics* (5th ed., 1893) の翻訳であり、「本書の翻訳するに当たり、東京帝国大学法科大学教師 [アーネスト・] フォックスウェル先生により遠く原著者に翻訳の許可と序文とを請ひたるに、原著書の欲諾を得たり。予輩は謹んで原著者に謝意を表し併せてフォックスウェル先生に謝するものなり」(2 頁)。訳者の山辺・太田はともに東京帝国大学在学中であり、この翻訳を「同窓学友相会し研究した」結果、出版したという。また、シジウィックからの序文となる書簡 (1898 年 6 月 15 日) が、肖像に続いて、英文のまま転載されている。

Cambridge July 15 1898

I am much interested to learn that my work on the “Methods of Ethics” has been translated into Japanese, by a group of students of philosophy in the University of Tokyo, under the direction and supervision of Professor Rikizo Nakashima. It gratifies me much to find that my book is, in the judgment of one so well qualified to judge as Professor Nakashima, likely to be of use to earnest students of ethics in so distant a land, inheriting the moral traditions of so widely different a process of civilization. It has of course always been the ideal aim of every philosophical writer to obtain a system of which at any rate the general principles and method should be valid for thoughtful men in all ages and countries. But I have always

felt the difficulty of realizing this ideal to be especially great in the department of Ethics: accordingly, when I composed my book. I did not aim at the complete exposition of a dogmatic system of ethics, but rather sought to assist my readers [one word deleted, invisible] to bring their own independent moral thought into a more precise and systematic form. I trust that such assistance may to some extent be given by it to the distant readers of an Asian tongue to whom these lines are addressed: so that these who have perseveringly accomplished the laborious task of translation may feel that their toils have not been thrown away.

Henry Sidgwick

*Methods of Ethics* の邦訳について、アーネスト・フォックスウェルが H. シジウィックと中島との間を仲介した。その最初の書簡（発信地：Metropole Hotel；以下同様）は、1898 年 6 月 14 日付書簡である。その中で、邦訳の許可と翻訳の序文・写真の送付を依頼し、ニューナム・カレッジに留学している日本人女性が「ときどきひどい孤独感を味わっている」と書いている（Trinity/Add. Ms. c /93/138）。第 2 信のアーネストのシジウィック宛書簡（1898 年 9 月 7 日）では、送付された写真と序文中島が喜んでいると記されている（Trinity/ Add. Ms. c /93/139）。このようにしてシジウィックから送られた序文としての書簡が上記のものであり、写真とともに『倫理学説批判』に収録されている。アーネストのシジウィック宛の第 3 信は、1898 年 12 月 4 日（Trinity/Add. Ms. c /93/140）であり、邦訳初版 2,000 部が出版され、来年 6 月にも邦訳第二刷の出版も期待されていると書いている。中島自身も、1899 年 2 月 8 日付でシジウィックに直接書簡を送っている（Trinity/Add. Ms. c /94/165/1）。その中で、中島は翻訳の許可への感謝を示し、送付された写真を返却すること、現在その邦訳は発売中であり、この邦訳が「日本における倫理学の批判的研究に大いに役立つことを期待する」と書くと同時に、シジウィック夫人から得られた援助に感謝し、その親切さに心からの感謝の意を伝えてほしいと書いている。

また、書簡の形ではないが中島が東京大学での邦訳（スペンサー、ミル、ベンサム、バイン）をも含めた哲学研究の現状とこの翻訳にかかわった学生 10 名の名前を列挙した、日付の書かれていないメモ（Trinity/Add. Ms. c /94 / 165/2 : n.d.）がシジウィックに送られている。さらに太田秀穂は 1899 年 2 月 7 日付書簡（Trinity/Add. Ms. c /94/171）で、邦訳者を代表して邦訳の許可に対する謝辞と日本における西洋の倫理学研究がまだ十分に発達していないと指摘し、この邦訳が日本の西洋倫理学の研究の促進に役立つことを願っていると書いている。

最後の書簡は、中島からシジウィック夫人ノラ宛 1900 年 10 月 30 日の書簡（Trinity/Add. Ms. c /101/60）で、中島をはじめ邦訳者のシジウィックの死去（1900 年 8 月 28 日）へのお悔やみを書いている。この情報と書簡のコピーの入手については、近畿大学経済学部准教授中井大介氏にお世話になった。記して厚くお礼を申し上げます。

なお、ニューナム・カレッジ（Newnham College, 1871）へは、下田歌子（安政元<1854>年 8 月 9 日-1936 <昭和 11>）年）が、1894（明治 27）年、女学校教育の視察ため欧米を視察した際に同校を訪問し、1895（明治 28）年 8 月に帰国した（大関啓子 [1994] 1-21 頁）。この「孤独感を味わっている」女子学生を現時点では特定化出来ないが、下田のこの訪問と関係があるかもしれない。

4) Sidgwick, Henry (1838-1900) は、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジで学び、1859 年

に同大学のフェローとなり、国教会との軋轢を引き起こし（1869年宗教上の理由から辞任）つつも、1883年に道徳哲学の教授に就任し、1900年まで務めた。1900年、同大学の評議員に選ばれ、大学改革を提案し、女性の高等教育運動の推進者となった。道徳論から経済、科学、政治学に至る分野で、様々な倫理学を批判し、J. ベンサム、J.S. ミルを継ぐ功利主義を主張した。著書に *Methods of Ethics* (1874)、*The Principles of Political Economy* (1883) などがある。なお、日本におけるシジウィック研究には、中井大介『功利主義と経済学—シジウィックの実践哲学の射程—』（2009）がある。

- 5) Eleanor Mildred (Nora) Balfour (1845-1936) は、1876年に H. シジウィックと結婚した。彼女は H. シジウィックによる女性の高等教育運動の重要な推進者となった。彼女はシジウィックの元生徒であったトーリー党の政治家 Arthur James Balfour (1848-1930：ケンブリッジ大学在学：1866-69) の妹である。結婚後数年間は、Hillside, Chesterton に住んだが、1893年に降ニューナム・カレッジに住んだ (H.C.G. Mattjew and Brian Harrison [2004] vol.50, pp. 528-30 [Sidgwick[née Balfour], Eleanor Mildred])。)

Letter 【13】<sup>1)</sup> 1908年3月1日

Tokio  
March 1st  
1908

Dear Prof. Foxwell

Allow me to inform you that Baron Sakatani<sup>2)</sup> ex-Minister of Finance will forward you this letter on his arrival to England. His career is well known and so are his great services rendered to our Country.

No better authority can be found in matters related to our finance and economy.

Please allow him the same kindness as shown to me.

Yours sincerely,  
J. Soyeda

1) 封筒表には、以下の宛名・住所が書かれている。

Prof. Foxwell / 1, Harvey Road, / Chambridge. [sic.] / or London University / Gower Str. / London

なお、この封筒には切手が貼られておらず、以下の書簡 (Letter 【13-1】) を入れた封筒の中に

同封されている紹介状である。便宜上 Letter と表記する。

- 2) 阪谷芳郎 (1863-1941) は備中国後月郡西江原村 (岡山県井原市) 生まれ。1873 (明治 6) 年、箕作秋坪の三叉学舎に入学 (教科書: 「ピオネ文典」「バレー万国史」「スミス国富論」。同校の出身者に平沼淑郎、東郷平八郎、鎌田栄吉らがいる)。1876 (明治 9) 年、東京英語学校に入学 (8 年の生徒名簿には、平沼、金井延、添田寿一、穂積八束、石川千代松、田中館愛橘、内村鑑三、高田早苗らがいる)。1877 (明治 10) 年、東京大学 (東京開成学校と東京医学校の合併) 創立にともなう学制変更で、東京大学予備門第一学年に編入され、同校を 1880 (明治 13) 年 6 月に卒業し、同年 7 月東京大学文学部に入学、1884 (明治 17) 年、文学部「政治学及経済科」を卒業した。卒業証書に、英語学担当者として「エス・イー・ホイットニー」(ユネスコ東アジア文化研究センター編 [1975] [407 頁] によれば、Frederick E. Whitney が東京予備門に明治 11 年 9 月から 14 年 8 月まで務め、満期解雇されている。商法講習所のホイットニーとの関係については、現時点では不明である) の名前が記されている (故阪谷子爵記念事業会 [1951] 53-66 頁)。7 月、添田とともに大蔵省に入省。西園寺内閣の大蔵大臣 (1906.1-1908)、1912 (明治 45) 年 7 月から 1915 (大正 4) 年 6 月まで東京市長 (白井勝美・高村直助・鳥海靖・由井正臣 [2001] 458-59 頁)。1908 (明治 41) 年 1 月に大蔵大臣を辞任し、4 月 15 日に外遊に出発した。新橋駅で松方正義、渋沢栄一、添田寿一日本興業銀行総裁らが見送った。アメリカを経て 6 月 2 日にリヴァプールに着き、アスキス首相、グレー外相、ロイド・ジョージら政府要人に会うとともに、すでに帰国していたシャンド (A. A. Shand, 1844-1930: 在日 1863-1873) とも会っている (318 頁)。このシャンドが創設した大蔵省所属銀行事務講習所は、1886 (明治 19) 年 5 月になって文部省所轄となった東京商業学校の銀行専修科となった (酒井龍男 [1925])。

Letter 【13-1】<sup>1)</sup> 1908 年 6 月 4 日

Coburg Hotel,  
Grosvenor Square,  
S.W., June 4th 1908.

Dear Sir,

I take the liberty to forward the letter of introduction from Mr. Soyeda, to you, enclosed herewith.

I should like very much to have the pleasure of seeing you when it is convenient to both of us. Having just arrived, I am not yet sure how long I shall stay in England.

When I shall have made up my mind as to my future movements, I shall be only too delighted to let you know when I can ask you for the favour of meeting you.

I am, dear Sir,  
Yours faithfully,  
Y. Sakatani  
[Signature]

To Professor Foxwell.,

1) 封筒表には、以下の宛名・住所が書かれている。

Prof. Foxwell, / ~~e/o London University, Gower Street, London~~ / Harvey Road / Cambridge / また、封筒表には、異なる筆跡で、以下のコメントが書かれている。

Baron Sakatani. Coburg Hotel. / Fridays / Tuesd[ay]. 3 in town / Thurs[day]. 5 at Savile / or Mon[day]. Sat[urday]. at / Cambridge

また、消印は London. E.C. / 1.30 PM / Jun 5 [19]08 と押印されている。また、この書簡は、署名以外はタイピングされている。

#### 引用・参考文献

安東伸介・小池滋・出口保夫・船戸英夫編 [1982] 『イギリスの生活と文化辞典』 研究社

R.D.Collison Black and Rosamond Könekamp [1972] *Papers and Correspondence of William Stanley Jevons*, vol. I, Biography and Personal Journal, Macmillan

Blaug, M. and Sturges, P. [1983] *Who's Who in Economics: A Biographical Dictionary of Major Economists 1700-1981*, Wheatsheaf Books

Clark, J.W. [1902] *The Books of Matriculations and Degrees: a Catalogue of those who have been Matriculated or admitted to any Degree in the University of Cambridge from 1851-1900*. Cambridge University Press

Groenewegen, Peter [1995], *A Soaring Eagle: Alfred Marshall, 1842-1924*, Edward Elgar

井上琢智 [2006] 『黎明期日本の経済思想—イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化—』 日本評論社

井上琢智 [2008-2,4] 「イギリス留学生伊賀陽太郎宛書簡に見る日英交流—イギリス人家庭教師ハムを中心に— (1)(2)」 『経済学論究』 (関西学院大学) 第 61 巻第 3・4 号

井上琢智 [2010] 「伊賀陽太郎滞英時代の英文ノート」 『経済学論究』 (関西学院大学) 第 63 巻第 4 号

- 岩波書店編集部 [1991] 『近代日本総合年表』第 3 版、岩波書店  
岩波書店辞典編集部 [2013] 『岩波 世界人名大辞典』全 2 巻、岩波書店  
実業之日本社 [1903] 『当代の実業家の解剖』実業之日本社  
川崎晴朗 [2002] 『築地外国人居留地』雄松堂書店  
Keynes, J.M. [1972] *Essays in Biography, The Collected Writings of John Maynard Keynes*, vol. X (大野忠男訳『人物評伝』東洋経済新報社、1980)  
経済学史学会 [2000] 『経済思想史辞典』丸善  
故阪谷子爵記念事業会 [1951] 『阪谷芳郎伝』故阪谷子爵記念事業会  
小山騰 [1999] 『破天荒<明治留学生列伝>』講談社  
守屋毅 [1988] 『共同研究 モースと日本』小学館  
長井実編 [1988] 『自叙伝益田孝翁伝』中央文庫  
長岡祥三 [2002] 「ホテル・メトロポール略史」築地居留地研究会編『近代文化の原点—築地居留地—』vol.1, 2000 年 10 月  
日本キリスト教歴史大事典編集委員会 [1988] 『日本キリスト教歴史大事典』教文館  
西川俊作 [1985] 『福沢諭吉と三人の後進たち』日本評論社  
西沢保 [2007] 『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店  
大鹿武 [1987] 『幕末・明治のホテルと旅券』築地書館  
大関啓子 [1994] 「『まよひなき道』—下田歌子英国女子教育視察の軌跡—」『実践女子大学文学部紀要』第 36 集  
H.C.G.Mattjew and Brian Harrison (ed.) [2004] *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press  
酒井龍男 [1925] 『一橋五十年史』東京商科大学一橋会、1925。  
アーネスト サトウ、長岡祥三・福永郁雄訳 [1991] 『アーネスト・サトウの公使日記』新人物往来社、  
週刊朝日編 [1981] 『値段の明治・大正・昭和風俗氏史』朝日新聞社  
立脇和夫 [1987] 『在日外国銀行史—幕末開港から条約改正まで—』日本経済評論社  
立脇和夫 [2002] 『在日外国銀行百年史-1900~2000-』日本経済評論社  
東京大学経済学部 [1975] 『東京大学経済学部五十年史』東京大学出版会  
ユネスコ東アジア文化研究センター編 [1975] 『資料 御雇外国人』小学館  
白井勝美・高村直助・鳥海靖・由井正臣 [2001] 『日本近現代人名辞典』吉川弘文館  
ホイットニー、クララ：一又民子訳 [1976] 『クララの明治日記—明治 11 年 7 月 19 日~明治 20 年 4 月 17 日—』全 2 巻、講談社。  
Whitaker, J.K. [1996] *The Correspondence of Alfred Marshall, Economist*, 3vols. Cambridge U.P.